

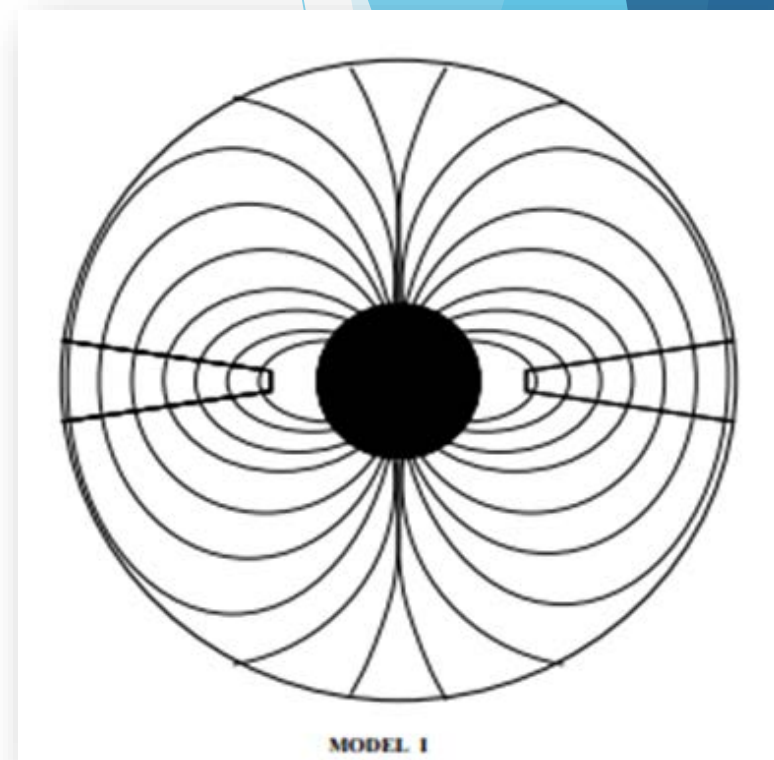
強磁場中心天体と 周辺プラズマの 相互作用シミュレーション

2018/2/22

宇宙物理学研究室 河村浩良

目的

- ▶ 数値計算により、中心天体がダイポール磁場を持つ場合の相互作用の様子をシミュレーション。
- ▶ ダイポール磁場のような強い背景場が存在しても、安定して数値計算できる工夫が必要。
- ▶ 今回は、その数値コードの開発まで。



MILLER & STONE (1997)

ダイポール磁場とは？

- ▶ 地磁気もダイポール磁場。
- ▶ 磁場の式は以下の様になる。

$$\mathbf{B}_0 = -\frac{1}{4\pi} \left\{ \frac{\mathbf{m}}{r^3} - \frac{3(\mathbf{m} \cdot \mathbf{r})}{r^5} \mathbf{r} \right\}$$

$\mathbf{m}$:磁気双極子モーメント

- ▶ 次のような特徴を持つ。

$$\nabla \times \mathbf{B}_0 = 0$$

シミュレーション方法

- ▶ 磁気流体コードCANS+を使用。
- ▶ 初期条件にダイポール磁場を与えた。
- ▶ 強磁場の場合、安定して計算するのは難しい。
- ▶ 数値計算において、磁場を $\mathbf{B} = \mathbf{B}_0 + \mathbf{B}_1$ の形に分離。
- ▶ $\mathbf{B}_1$ について解くコードへCANS+を変更。
- ▶ 特に、数値フラックスを求めるための近似リーマン解法に対して、修正を行った。(最終的にはHLLD法に切り替え)

なぜ、磁場を分離する必要があるのか？

- ▶ 計算による誤差が大きくなるのを防ぐため。例えば、エネルギーについて考える。背景場が大きい場合、全エネルギーに占める磁場のエネルギーが多くなる。
- ▶ 全エネルギーから磁気エネルギーの差をとったときに桁落ちが生じてしまい、圧力などの計算で誤差が大きくなってしまう。
- ▶ また、背景場が大きい場合、数値計算で磁場の誤差により $\nabla \times \mathbf{B}$ が大きくなり、誤差から生じるローレンツ力による運動が起こる。これを抑えたい。
- ▶ 背景場分離したMHD方程式を導出し、CANS+に導入した。

理想MHD方程式

▶ 一般的な方程式

$$\frac{\partial \mathbf{U}}{\partial t} + \nabla \cdot \mathbf{F} = 0$$

▶ 但し、

$$\mathbf{U} = \begin{pmatrix} \rho \\ \rho \mathbf{v} \\ \mathbf{B} \\ e \end{pmatrix} \quad \mathbf{F} = \begin{pmatrix} \rho \mathbf{v} \\ \rho \mathbf{v} \mathbf{v} + p_T \mathbf{\ddot{I}} - \mathbf{B} \mathbf{B} \\ \mathbf{v} \mathbf{B} - \mathbf{B} \mathbf{v} \\ (e + p_T) \mathbf{v} - \mathbf{B} (\mathbf{v} \cdot \mathbf{B}) \end{pmatrix}$$

ρ : 質量密度 $\mathbf{v}$: 速度ベクトル $\mathbf{\ddot{I}}$: 単位行列

$$p_T = p + \frac{|\mathbf{B}|^2}{2}$$

$$e = \rho \left(\varepsilon + \frac{|\mathbf{v}|^2}{2} \right) + \frac{|\mathbf{B}|^2}{2}$$

p : 圧力 $\varepsilon = \frac{p}{(\gamma-1)\rho}$: 内部エネルギー

▶ $B = B_0 + B_1$ の形に分離すると

$$\frac{\partial U_1}{\partial t} + \nabla \cdot F_1 = 0$$

▶ 但し、

$$U_1 = \begin{pmatrix} \rho \\ \rho v \\ B_1 \\ e_1 \end{pmatrix} \quad F_1 = \begin{pmatrix} \rho v \\ \rho v v + p_T \ddot{I} - B B_1 + B_1 B_0 \\ v B - B v \\ (e_1 + p_T + B_0^2) v - B(v \cdot B) \end{pmatrix}$$

ρ : 質量密度 v : 速度ベクトル $\ddot{I}$: 単位行列

$$p_T = p + \frac{|B_1|^2}{2} + B_1 \cdot B_0$$

$$e_1 = \rho \left(\varepsilon + \frac{|v|^2}{2} \right) + \frac{|B_1|^2}{2} + B_1 \cdot B_0$$

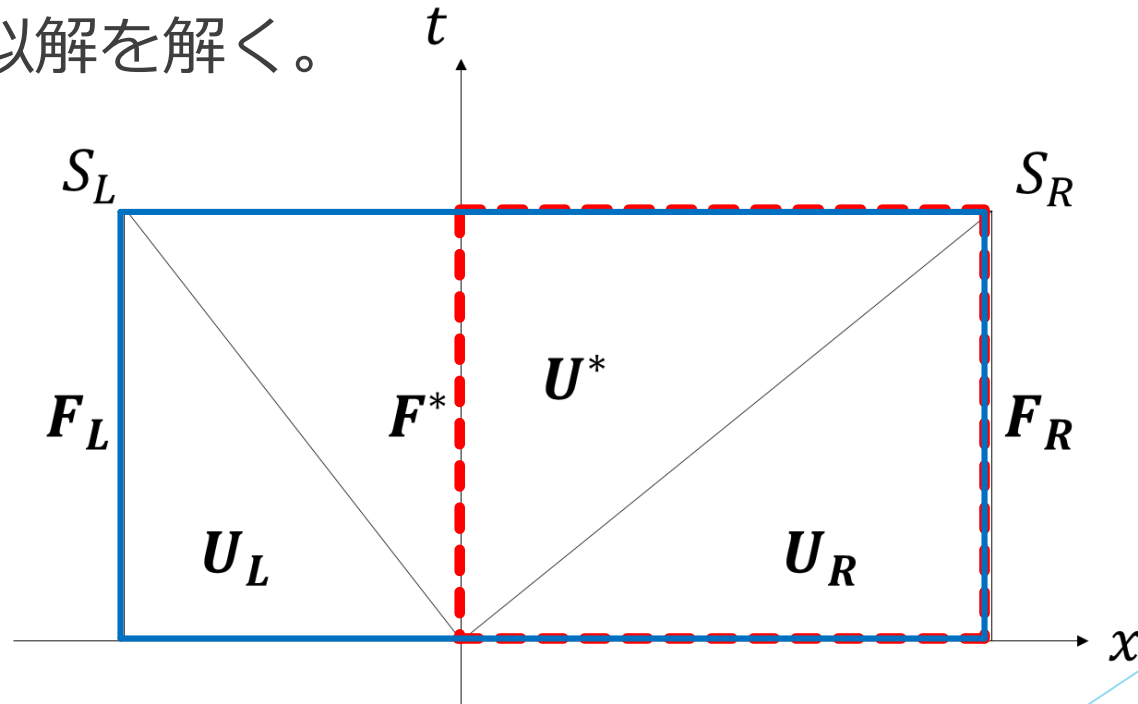
p_T : 圧力 $\varepsilon = \frac{p}{(\gamma-1)\rho}$: 内部エネルギー

HLL法 $\frac{\partial U}{\partial t} + \nabla \cdot \mathbf{F} = 0$ の数値解法

- ▶ 速い速度 S_R と遅い速度 S_L によって囲まれた $[S_L\Delta t, S_R\Delta t] \times [0, \Delta t]$ 領域(青線)において

$$\frac{1}{\Delta t} \int_{S_L\Delta t}^{S_R\Delta t} U(x, t) dx - S_R U_R + S_L U_L + F_R - F_L = 0 \quad \cdots (1)$$

を満たす近似解を解く。



- ▶ S_R と S_L によって囲まれた領域で、 U^* は一定であると仮定する。(1)式は以下の様に変形できる。

$$(S_R - S_L)U^* - S_R U_R + S_L U_L + F_R - F_L = 0$$

$$U^* = \frac{S_R U_R - S_L U_L - F_R + F_L}{S_R - S_L} \quad \dots (2)$$

- ▶ 次に、赤の点線によって囲まれた領域での保存則を考える。
- ▶ (1)より、

$$S_R U^* - S_R U_R + F_R - F^* = 0 \quad \dots (3)$$

が得られる。(2),(3)より、

$$F^* = \frac{S_R F_L - S_L F_R + S_R S_L (U_R - U_L)}{S_R - S_L} \quad \dots (4)$$

が得られる。ここで、 S_R, S_L は、

$$S_R = \max(v_R + c_{fR}, v_L + c_{fL})$$
$$S_L = \min(v_R - c_{fR}, v_L - c_{fL})$$

であると、近似する。

▶ 例えば、

$$F_{rxl} = \rho_{xl} v_{xl}^2 + p_{tl} - B_x^2$$



$$F_{rxl} = \rho_{xl} v_{xl}^2 + p_{tl} - \{(B_0 + B_x) \times B_x + B_x \times B_0\}$$

のように変更。他の成分、右側のフラックスも分離したMHD方程式に変更。

$$U_1 = \begin{pmatrix} \rho \\ \rho v \\ B_1 \\ e_1 \end{pmatrix} \quad F_1 = \begin{pmatrix} \rho v \\ \rho v v + p_T \ddot{I} - B B_1 + B_1 B_0 \\ v B - B v \\ (e_1 + p_T + B_0^2) v - B(v \cdot B) \end{pmatrix}$$

規格化

- ▶ 空間スケール：中心天体の半径 H_0 (以降 R で表記)
- ▶ 磁場スケール：極での磁場 B_0
- ▶ 密度スケール：中心天体の密度 ρ_0
- ▶ 速度スケール：
$$v_a = \frac{B_0}{\sqrt{4\pi\rho_0}}$$
- ▶ 時間スケール：
$$t_0 = \frac{R}{v_a}$$
- ▶ 圧力スケール：
$$p_0 = \rho_0 v_a^2$$

計算モデル

▶ 初期条件

$$R = 1.0 \quad \rho = 1.0$$

$$v_x = v_y = v_z = 0.0$$

$$p = 0.010 \pm 0.001 (10\% \text{の擾乱})$$

磁場は、極で大きさが 1.0 になるようにダイポール磁場を与えた。

$$\text{グリッド数} = 128 \times 128$$

$$\text{計算領域} : (0 \leq r \leq 10, -5.0 \leq z \leq 5.0)$$

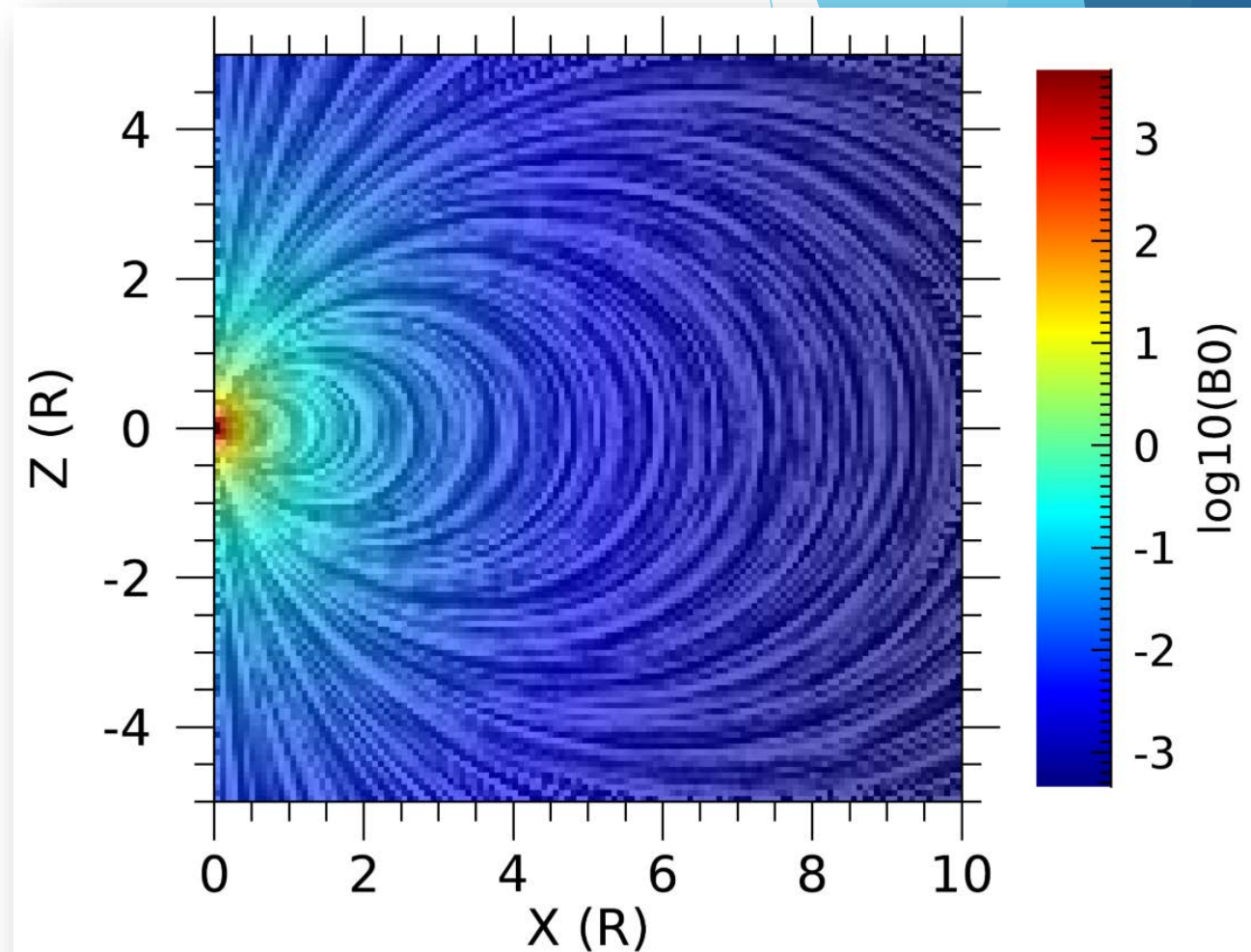
▶ 境界条件

$r < 1.0$: 初期状態を代入

φ 方向 : 周期境界条件

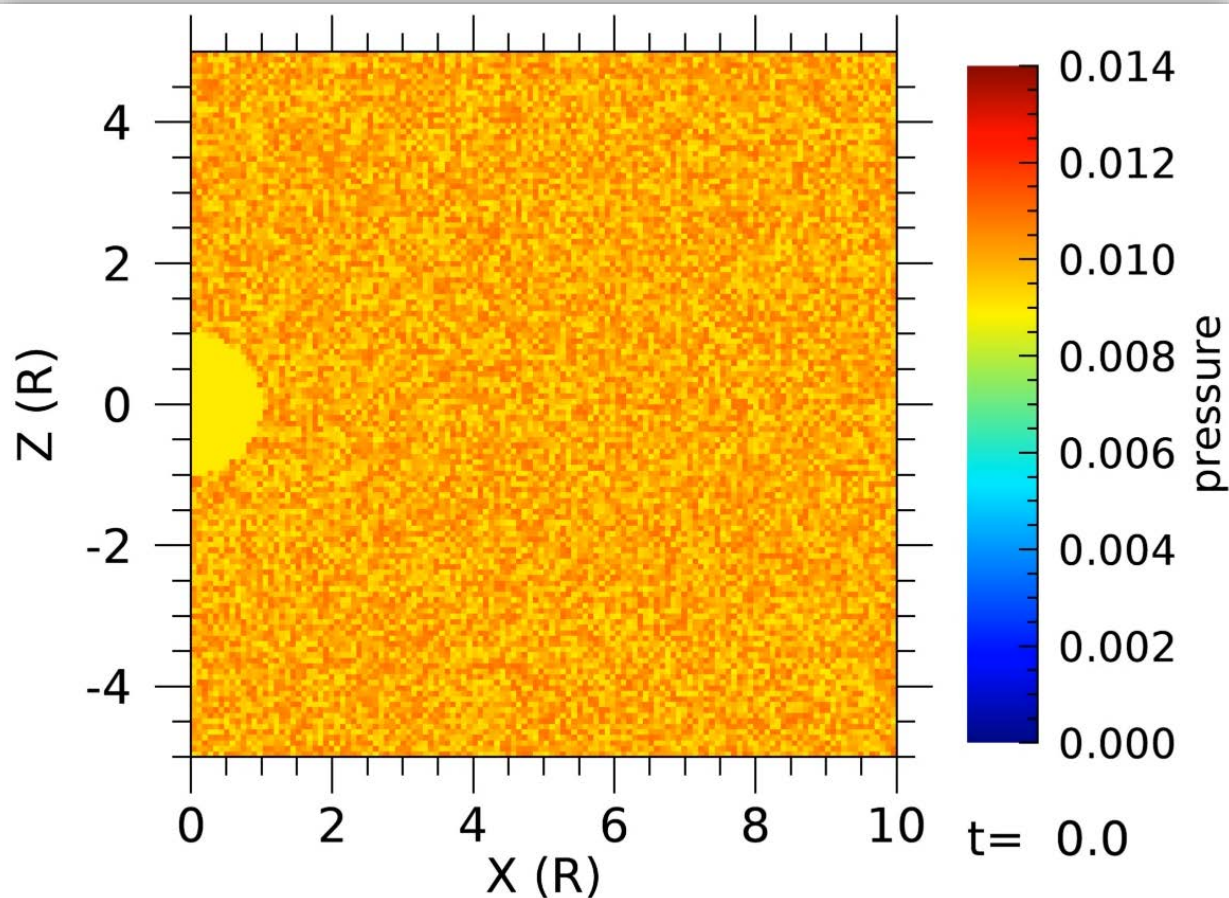
z 軸 : ρ, p, v_z, B_z は対称。 v_x, B_x は半対称。

それ以外の計算領域の境界 : 自由境界条件(物理量外挿)

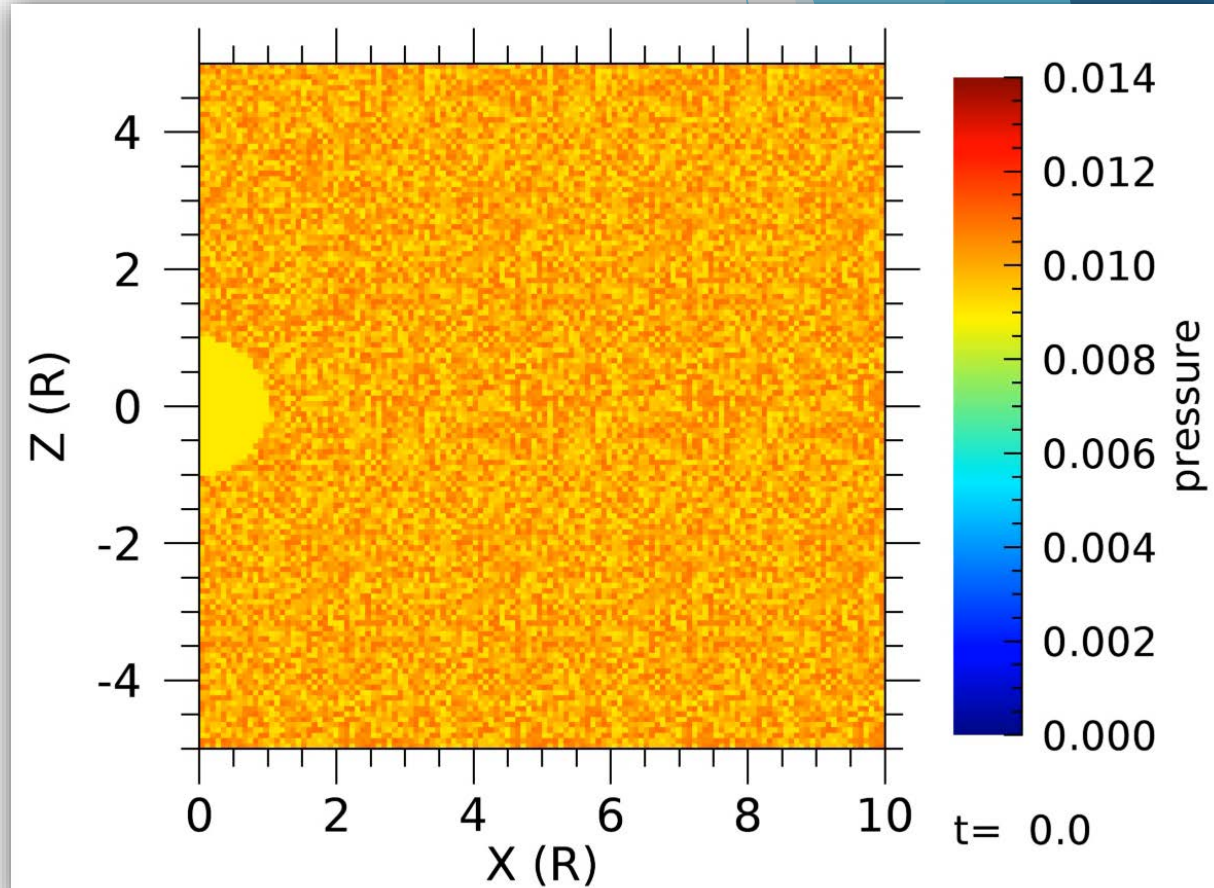


圧力分布

分離なし

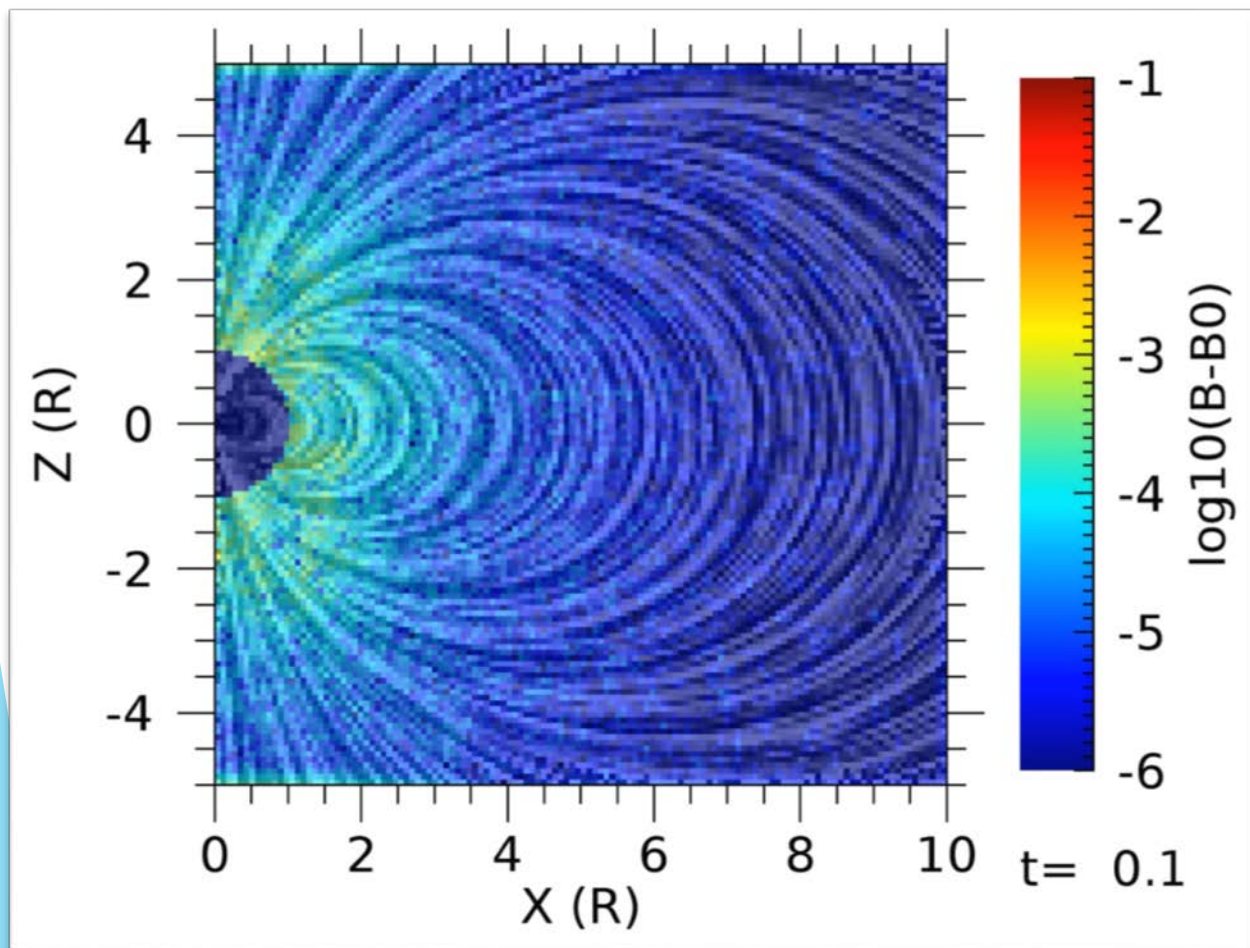


分離あり

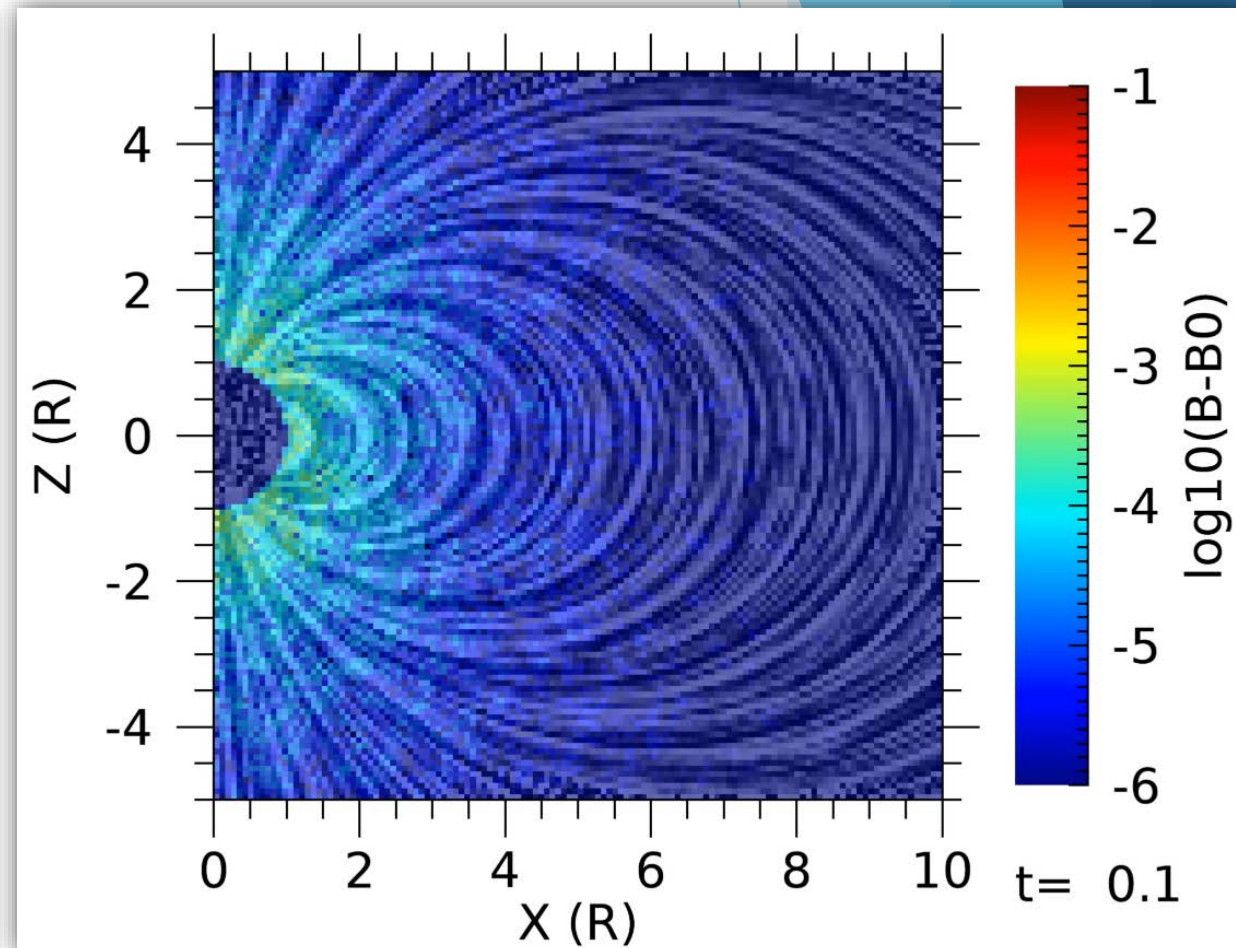


磁場の時間変化

分離なし



分離あり

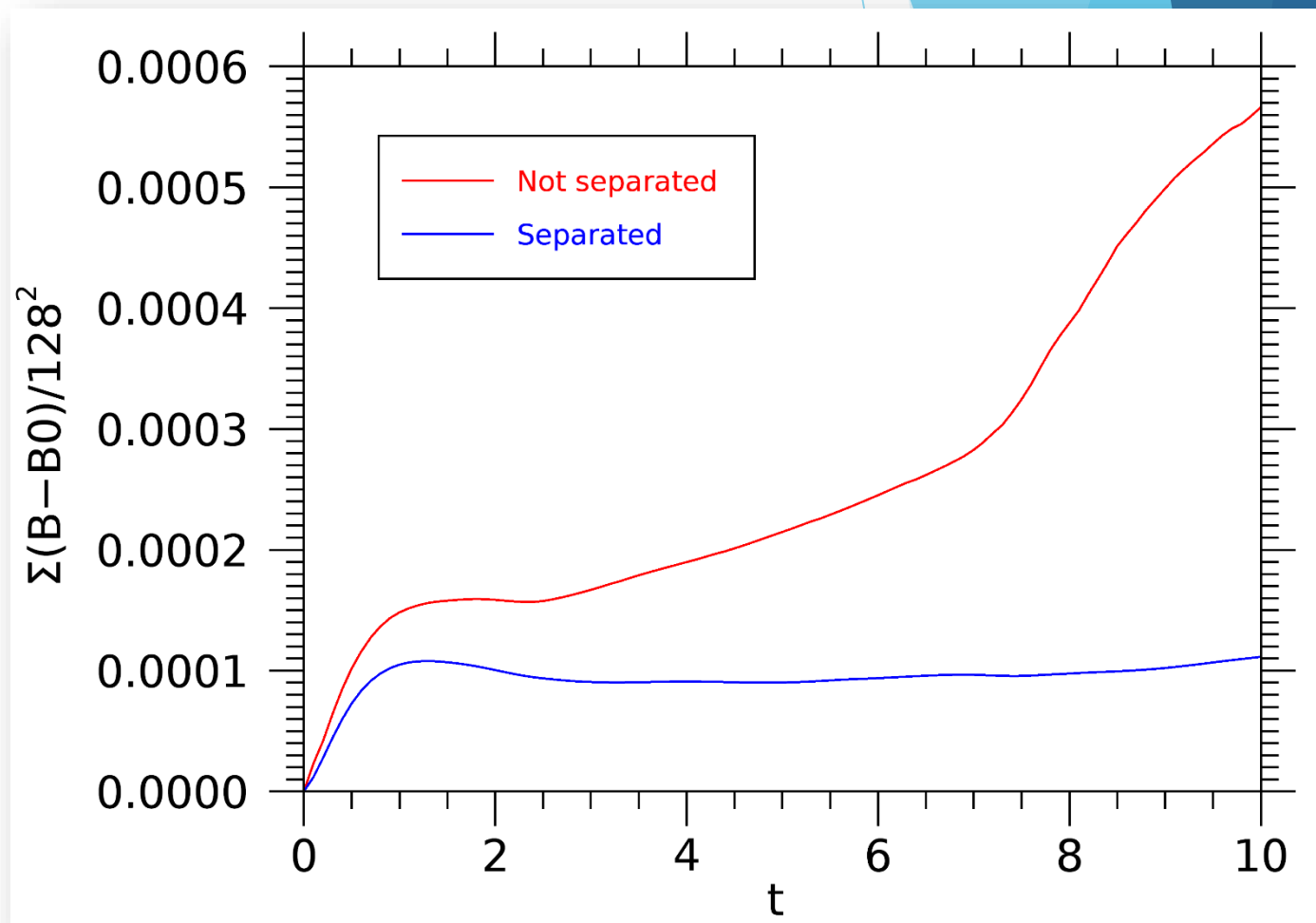


全領域での $B - B_0$ の和の時間変化の平均

- ▶ 赤線が分離なし。青線が分離あり。
- ▶ 分離なしだと、時間経過と共に増加する。



- ▶ 分離すると、およそ $t = 1.0$ 後はほぼ変化しなくなる。



まとめ

- ▶ CANS+を修正して、背景場を分離したコードを作成して、テスト計算を実施した。
- ▶ 分離する前と比べて、誤差が小さく保たれた。
- ▶ 今回は、ダイポール磁場のみ。⇒ 今後、周辺にディスクにおいて相互作用シミュレーションを行う。